

(添付資料 1)

最優秀賞・70周年特別賞
文部科学大臣賞

私の将来について
岩手県北上市立上野中学校
2年 赤坂 真之介

私は身体障害者手帳というものを持っています。ちゃんと見たことはなかったので、今回母親にちゃんと見せてもらいました。そのなかで一番気になったのは、障害には等級というものがあることです。等級は一級から七級まであります。一級は、一番肢体の不自由の度合いが重く、七級が一番軽い肢体不自由の度合いになります。私の障害は若年性脳梗塞による右上肢機能障害二級と右下肢機能障害七級というものでした。

右上肢機能障害二級は、右腕右手の著しい機能障害です。私の場合は、リハビリのおかげでひじを曲げたりできますが、手首から下、特に手指の曲げ伸ばしが自分の意思ではできません。

右下肢機能障害七級は、右足の軽度の障害です。私の場合、腰から下は頭で「動け！ 動け！」と強く念じなければちゃんと動きません。

この障害を持ったきっかけは小学3年生の時に突然グラウンドで倒れて、意識不明の状態ですぐ救急車で運ばれたことでした。集中治療室、医科大学、リハビリセンター合わせておよそ6カ月の入院生活になりました。病院には私と同じように脳梗塞や脳出血をわずらった人が多く、その人達のほとんどは50代以上の方ばかりでした。その中で交通事故により頸椎損傷を負い、首から下が不自由になった19歳のお兄さんがいました。車いすで何回も転倒し「暴走族」と名を馳せていた私と、車いすへの移動が自分では難しく、看護師さんに手伝ってもらっていたお兄さんは、同じ部屋の向かい合ったベッドでずっと一緒にいました。会話も満足にできず、二人の障害はまったく違ったけれど、いつも二人で競い合うようにリハビリをしていました。

今まで何不自由なく元気に過ごしていた人が、年齢も性別も関係なく、突然普段の日常生活が一変してしまうことがあると中学生になった今、とても強く感じています。こんな病気にならなければ……。後遺症による障害なんてなければ……。皆と同じように自転車に乗って、友達の家に行ったり、野球の練習試合に行ったりできたのに……。両手で重い物を持ったり、パソコンの入力を両手でできたり、ゲームのコントローラーを両手で操作したりできたの

に……。そもそもこの病気がなければ利き手を右から左に変える必要がなかった。食事の時には字を書く手も変える必要がなかった。今の生活も、これからの将来ももっと違うものがあったのではないだろうか。そう思う日もあります。

いろいろな思いがありますが、今も生きているのは、家族、病院の先生、学校の先生、友達など、私と関わってくれた人達すべてのおかげです。障害という不自由を抱えているからこそ、出会うことができた人達があります。

10年後、私は24歳になっています。一般的には就職しているか、大学に進学しているか、結婚して幸せな家庭を持っている人もいるかもしれません。ただ、私にはこのような将来が想像できません。両親、兄弟、その他のさまざまな人達の助けがあり、今は生活していますが、将来、自分一人で自立して生きていくためには何が必要なのかまだ模索中です。

世のため、人のためとよく聞きます。私も世のため人のためと思いますが、まず自分自身がしっかりとした生活の基盤を持ったうえで、いずれは自分と同じように困っている人の助けになる仕事、私を助けてくれた人への恩返しができる仕事、そして自分のやりがいのある仕事に就きたいです。仕事ではなくても日常生活でも、その人の持つ多様性に偏見を持たず接することができるような大人になりたいです。そして障害を持ったからこそ、幸せだったと思えるような人生を歩みたいです。

10年後の自分へ。

元気でやっていますか？ 理想の自分になれていますか？ 多分、なれていないかな？ 24歳になった今、できなくてあきらめてきたことは、もしかして今の倍以上になっているかもしれませんね。入院中の一時外泊で、無理を言って連れて行ってもらった「花巻まつり」も、金魚の水槽の前で転んでしまった。結局途中で歩けなくなって帰りは父さんが息を切らしながら、車までおんぶしてくれた。病気のことだって、風邪だと思って「いつか皆と同じように治るんでしょう？」と言って両親が困った顔になった。あの時の悔しさ、申し訳なさ、何より自分はどうなってしまうんだろうという不安、まだ覚えているでしょう？

でも、私はそこから頑張ったよ。だから10年後のあなたが理想の自分になれていなくても、うまくできないことがあっても、頑張っているなら嬉しいです。頑張れ!! 自分!!